

関西支部 LMAG 第 16 回現地講演会 2019/4/13 記録
Report of 16th LMAG Kansai On-site Lecture Meeting

LMAG 関西 事務局

講演会の概要

講演者(Lecturer) : 国立民族学博物館 久保正敏 名誉教授

講演題目(Title) : ” 情報学と民族学のあいだ ―理系と文系の橋掛けを目指して”

日時(Date)

2019 年 4 月 13 日(土) 13:30 - 16:30

場所(Place)

国立民族学博物館 第 6 セミナー室

主催 (Organizer)

IEEE Kansai Section

IEEE Kansai Section Life Members Affinity Group

参加者

18 名

(IEEE 会員 13 名 (LMAG 9 名 / LMAG 事務局 1 名), 非会員 5 名)

講演者を含む。

プログラム (Program)

13:20 民族学博物館ロビー集合

13:30 開会の挨拶 (中村 関西 LMAG Chair)

13:35 久保正敏 国立民族学博物館名誉教授によるご講演

15:30 施設見学

16:15 質疑 Q&A

16:30 閉会の挨拶(西浦 TPC 関西 Chair)

講演概要(Brief Report)

講師の久保教授のご専門はもともと情報工学であったが、国立民族学博物館の創設時に立ち上げられたコンピュータ民族学（Computer Ethnology）という新しい研究分野に参加し、情報工学と民族学をつなぐ学際的研究に従事されてきた。各地の博物館を結ぶ横断的なデータベースの構築にとどまらず、1980年代から生じた、従来の民族学・文化人類学研究への反省、すなわち、民族誌（Ethnography）記述の客観性への疑問（e.g. 記述する側と記述される側の対等性。前者が後者を支配）や記述や資料の収集が一方的で記述される側へ還元されない、などの反省を踏まえて、民族誌を人類の共有資産としての「文化資源（Cultural Resources）」にするための新しい参加型のデータベース：フォーラム型データベース（Forum-Type Database）を提案し、その構築、普及を推進しておられる。

また様々な民族の情報文化の研究を目的とした民族情報学（Ethno-Informatics）という新しい研究分野を立ち上げられ、その一例として久保教授がフィールドワークを実施されたオーストラリア先住民であるアボリジニの社会の情報伝達に関する研究例をご紹介頂いた。伝統的に採集狩猟社会のアボリジニの物質文化は簡素であり、また無文字社会であった。それゆえ逆に豊かな精神世界（Dreaming）の中で生きてきた。無文字社会、言い換えると音声言語社会の情報伝達は、メッセージ性の低さ、文脈依存性、意味の多様性、図的イメージ操作能力の高さなどの特徴がある。それらは現代社会における情報伝達には不向きな面もあるが、そこから学ぶことも少なくない。と言うのもこの特徴は、コミュニケーションの語源であるラテン語 *communis* の状態と極めて近いものだからである。また逆に言えば、文字の発明による情報化＝脱文脈化はメリットもあるがデメリットもある。現代社会においても、互いの文脈を「イメージ」する努力、自らの文脈を示す努力が豊かなコミュニケーションのために必要ではないか。

講演終了後アボリジニ関係の展示を見学したあと質疑応答が行われた。参加者からは、学際的研究の重要性、その幅広い応用の可能性、など、幾つかの質問やコメントがあった。